

Lord Conrad

平 出 昌 嗣

1

Conrad の原型的主人公とは、己れの夢の中に閉じ込められて、自分自身から、社会から、また周りの自然の世界から疎外された孤独な人間である。彼らは夢の実現の内に自分の存在感を見出そうとするが、創造された現実の根底には、そのために否定された真の現実が無として、闇として、常に横たわっており、幻影の消えた時、彼らは闇の中に投げ出された絶対的に孤独な自己を見出さなければならぬ。それはそれでよい。その人間観は、多かれ少なかれ、Conrad と同時代の作家達の共有財産である。時代は帝国主義、資本主義の時代であり、搾取、疎外、分裂、無と闇が、世界を、社会を、また人間の心を覆っている。Conrad にとっての問題は、むしろ、そうした人間の姿を虚構化する時、その創造行為が主人公のそれと同じものになるのではないかという懐疑にあったろう。*Lord Jim* 前後に書かれた手紙には、書くことへの深い、時に絶望的なまでの苦悩が見られる。とりわけ次の手紙は、言葉への本質的懐疑を端的に表現している。

Words blow away like mist and like mist they serve only to obscure, to make vague the real shape of one' feelings.... Were I to write and talk till Doomsday you would never really know what it all means to me. You would not know because you never had just the same experience...

Satis. Enough words. The postman will carry away this letter, the mist shall blow away and in the morning I shall discern clearly what tonight I am trying to interpret into writing--which remains. Let it remain, to show with what thundering kick the gods of life shut the door between our feeling and its expression. It is the old tale, the eternal grievance. If it were not for the illusion of the open door--sometimes--we would all be dumb, and it wouldn't matter, for no one would care to listen.¹

Conradにとって、言葉は感情を表現するものではない。むしろ霧のようにそれを覆い隠すものとしてある。その限り、いかに自分の感情を語ろうとしても、語られたものは既に偽りであり、人は自己の感情からも聞き手からも疎外されざるをえない。この否定的な言語観はさらに次のことを意味する。即ち、作者がそのビジョンをいかに表現しようとしても、その作品は、言葉を通す限り、既に元のビジョンを隠すものになっていること、そしてその疎外において、作者は夢により現実から隔てられた主人公と同じ位置に置かれてしまっているということである。この主人公との同化の可能性からいかに逃れたらよいのか――本論の目的は、この作者と主人公との同化の可能性の中で、作者がいかに作者としてのアイデンティティを保つかという観点から *Lord Jim* を分析してみることにある²。

2

作者と主人公との同化の可能性とは、言い換えれば、作者は Lord Conrad として、Jim の Patusan と同じ虚構世界を作りうる宿命にあったということである。Jim の Patusan、つまり彼が Lord として君臨していただける秩序と安定を持った社会は、確かに、“a hero in a book” (p.6)³のようになりたいという彼の夢の明確な表現ではある。彼はその夢こそ人生の “secret truth” (p.20) と見なし、

その実現のために、彼の犯罪者としての過去を知る「彼ら」と手を切り、その社会を捨てたのだ。しかし、Marlow との別れ際に思わず口を突いて出る “Tell them.... No--nothing” (p.335) という曖昧な言葉が示すように、あるいは Patusan の人達は決して “the real, real truth” (p.305) を知りえないという彼の嘆きを示すように、彼の本当の夢とは、Patusan で Lord となることではなく、故国に帰り、「彼ら」に仲間の一人として受け入れてもらうことだ。彼が Patusan に作り出した倫理、秩序、平和、人間関係も、つまりは彼の故郷のそれであり、結局 Jim は、Patusan という “a clean slate” (p.185) に想像力で自分の失われた故郷を描き出し、その幻影の中で、独り、故郷の人々に受け入れられているという夢を見ていたにすぎない。その意味で、つまり Lord となることで故郷にいる夢を見、そのことで逆に故郷への思いを忘れてしまうという意味で、Patusan は Jim の感情の表現でありながら、また彼の真の感情を隠す霧ともなっていると言える。またその意味で、それは、言葉の霧によって作者の元のビジョンから疎外されてしまった作品のメタファーとも解釈できるのである。

Lord Jim で Marlow が中心的語り手とならなければならなかった根本的理由は、作者が全知の神として明確な Jim 像を示し、秩序と安定を持った虚構世界を作れば、彼は否応なく Lord Conrad としての自己欺瞞に陥ってしまうことにあつたろう。言葉が感情を隠すものとしてある限り、Jim の意味を真に語ろうとすれば、それは結局、先の手紙のように、その意味を語れないことを語るしかない。

Marlow の役割は、人間的語り手として、何よりもそのビジョンを示すことにあつた。彼は Jim をよく見られないと何度も繰り返して嘆く。そしてその語りは始めの “Oh yes. I attended the inquiry.... and to this day I haven't left off wondering why I went” (p.34) から終わりの “Who knows? He is gone, inscrutable at heart” (p.416) まで疑問に貫かれており、明確に断言する時でも、その断言はすぐに解体され、否定されて、疑問の中に飲み込まれてしまう。この Marlow の曖昧さは、彼にとって Jim が全くの謎としてあるというよりは、

むしろ心にあるそのイメージを言葉としてうまく表現できないことからくるだろう。というのも、彼自身が“words also belong to the sheltering conception of light and order which is our refuge” (p.313) と語るように、言葉は真実から逃れるための“refuge”であっても、真実を表現するものではないから。だから語り手として、彼がどんなに心にある Jim の意味を聞き手に伝えようとしても、それはその意味を隠すばかりでうまくいくことはありえず、彼の意味の探求の結論は必然的に、“the last word is not said, --probably shall never be said. Are not our lives too short for that full utterance which through all our stammerings is of course our only and abiding intention?” (p.225) という認識に終わらざるをえない。Jim を明確に表現する言葉を見出すことは不可能であるというこの Marlow の発見は、John O. Perry の言うように Conrad の世界における唯一の真実、唯一のビジョンであり⁴、作者は言葉の霧としての宿命を打破するために、この語りの否定的な意識をまず前面に押し出す必要があったのである。

もっとも、Jim を語れぬことを語るとは沈黙と同じではない。少なくとも言葉に表現できない者としての Jim 像を提示することである。さらに Conrad は先の手紙で、沈黙しないのは表現と感情の間に“the illusion of the open door--sometimes--”があるからとも言っている。Marlow の言葉で言えば、“the truth disclosed in a moment of illusion” (p.323) である。だが一体、感情を表現しうる言葉はいかにして可能となるのだろうか。

作品に使われる霧のイメージがその問題への糸口を与えてくれる。例えば、“I had another glimpse through a rent in the mist in which he moved and had his being” (p.128)、あるいはまた、“The views he let me have of himself were like those glimpses through the shifting rents in a thick fog--bits of vivid and vanishing detail, giving no connected idea of the general aspect of a country” (p.76) といったように、Marlow は霧の Jim 像を時々用いている。これは、言葉が霧としてあるなら、語りが生み出す、語りえないものとしての Jim の視覚的イメージと見られよう。霧の切れ目とは、感情と表現の間の「開かれたド

ア)、即ち真実を伝えうる透明な表現ということになる。しかしこの霧は、作品では、言葉の霧ではなく、Jim が身の周りに張り巡らせている彼の夢または想像力を意味する。霧が切れるのは、彼が夢から解かれて“one of us”としての好ましい姿を見せる時なのである。このように Conrad において、その霧のイメージにおいて、言葉と想像力が重なっている。言葉の霧の中にいる作者は、想像力の霧に包まれた Jim と、その現実からの疎外においてまさに同じ位置に立たされている。とすると、言葉がいかにか「開かれたドア」を作り出すかという問いの答えは次のようになるだろう。即ち、Jim が束の間でもなんらかの真実を見出す時の彼の想像力の霧の流れ方を、そのまま言葉の霧の流し方、つまり語り方にすることである。そして前者のその決定的瞬間こそ、Jim が絶對的に孤獨な自己を見出す時、つまり彼の破局の時に他ならない。

3

Jim の破局のロジックは、Patna 号、Patusan の両エピソードにおいて、闇の力の^{エビファニー}顕現、即ち無意識の自我の外面化、及びそれとの同一化という見方⁵が最も有効のようだ。それを認めた上で、ここでは、物語の語り方との対応を見るために、まず Jim が現実をいかにそう知覚するに至るか、その過程の問題を、想像力の流れという観点から見ておきたい。

まず Patna 号事件において、事故の前、Jim は“the unattainable horizon” (p.19) に目をやりながら、英雄になった夢に我を忘れていた。いわば Jim の想像力は遠く水平線にまで広がっていた。ところが、船がいったん沈没の危機にさらされるや、彼の“faculty of swift and forestalling vision” (p.96) は彼の目の前に恐ろしいパニックの光景を現出させる。その光景は現実のものではなく、英雄の夢と同じくあくまでも想像力の産物であるが、前と違い、今度は、Jim が自ら描き出しているにもかかわらず、外部から彼に向けられた脅威のように見える。Marlow は語っている。

... from his relation I am forced to believe he had preserved through it all a strange illusion of passiveness, as though he had not acted but had suffered himself to be handled by the infernal powers who had selected him for the victim of their practical joke.... All this had come to him : the sounds, the sights, the legs of the dead man--by Jove ! The infernal joke was being crammed devilishly down his throat. (pp. 108-109)

ここから受ける印象は、平和な時、いわば Jim の源から外部へ、水平線へと放出されていた彼の想像力の流れが、危機の時は逆流して、その源へ、Jim の内部へと抗し難く戻ってくるというものである。この時、英雄の夢の中で絶対主体としてあった Jim は、逆に、己れの想像力 (“the infernal powers”) の攻撃を受ける孤独で無力な客体と化し、その力の前にすっかり麻痺してしまう。彼が麻痺するのは、絶望的な大惨事の想像に自分の全エネルギーを費しているからである。つまり彼を捕える孤独感と麻痺感は、英雄の夢に耽っていた時のそれと同じものなのである。従って、Jim を襲う破壊的な想像力とは、それまでの創造的想像力が作り出していた秩序と安定の世界を破壊し、一掃することで、彼にそれまで意識されなかった自分の現実、つまり彼がその孤独な夢想において、本来の義務から、また本来の連帯社会から離脱してしまっているという事実を明らかにするものだと言えるだろう。

このロジックは Patusan でも同様である。Jim の創造的想像力は Patusan 全土に広がり、暗黒の地を現実には彼の理想の王国に作り変える。しかし、その想像的視野は、彼とは逆の破壊的想像力を持つ Brown が来た時、彼によって粉碎されてしまう。その過程は、具体的な事件の展開を待つまでもなく、二人の最初の会話に既に端的に示されている。

“‘Who are you?’ asked Jim at last, speaking in his usual voice. ‘My name’s Brown,’ answered the other, loudly ; ‘Captain Brown. What’s yours?’ and Jim after a little pause went on quietly, as if he had not

heard: 'What made you come here?' 'You want to know,' said Brown, bitterly. 'It's easy to tell. Hunger. And what made you?'

"The fellow started at this,' said Brown, relating to me the opening of this strange conversation between those two men, separated only by the muddy bed of a creek, but standing on the opposite poles of that conception of life which includes all mankind--'The fellow started at this and got very red in the face.' (pp.380-81)

Jim は Brown の問いに答えられない。ここに再び、Jim の自我の源から外へ、Patusan 全土へと流れていた想像力が逆流し、その源へと返るパターンが読み取れる。そしてやはり Jim は、戻ってきた想像力の前に麻痺して、それまでの Lord という絶対主体から、声も出せぬ孤独で無力な客体へと転化し、忘れていた罪人としての己れの現実を見い出さざるをえないのだ。

両エピソードにおいて、Jim の目覚めたその孤独な自我は、英雄の夢に浸っていた時は、その夢の前提条件として(というのも夢想には孤独が必要だから)、その夢を根本において支えていたために意識されなかったものだ。それは、想像された世界が Jim にとって現実の知覚の世界を成していたとすれば、その知覚を可能にさせていた彼の目の盲点、つまりその上には結像しないが、それなくしては一際の知覚がありえない目の盲点の部分に相当すると言えよう。盲点は、一般に、視界に意識されぬ小さな空白として現れているという。Jim の視界にもその空白は現れている。それは Patna 号では“the soft spot” (p.13) を持つ船長達、Patusan では Cornelius 及び Brown で、前者は Jim が “those men did not belong to the world of heroic adventure” (p.24) と思い、また後者は Marlow が、Cornelius について、“He has his place neither in the background nor in the foreground of the story ; he is simply seen skulking on its outskirts” (p.286) と見るように、彼らは Jim の世界では知覚されえぬ者達だ。それは彼ら無法者が、社会からの逸脱の点で彼と同じであり、彼の無意識の姿の投影像としてあるためである。しかし、外に向けられていた想像力が破壊的なものとして逆

流し、それ以前の理想の世界が相殺されてしまうと、孤独な自分が意識されると共に、彼ら無法者の姿が唯一の知覚対象として見えてくる。そして想像力が完全に Jim の源に戻る時(その瞬間を Patna 号の Jim は “my breath was driven back into my throat”(p.110) と表現している)、世界は消滅し、Jim は盲点、“the soft spot” の中に飛び込み、彼らと同化する。即ち彼は船長らを追って船からジャンプし、また Brown に昔の船上での自分を見て、彼をその窮地からジャンプさせてやる。それは彼が想像する絶望的状況、つまり彼がそれまでいた想像力の世界からの脱出であり、また赤裸々な現実の世界で、社会に背いた孤独な無法者としての自分を見出すことなのである。

このように想像力の再帰運動、または相反する二つの想像力の相殺作用が Jim を想像力の霧の中から追い出し、彼に現実を見い出させる。このロジックは真実を語る語りのロジックでもあった。では実際に Marlow の語りも同じ原理で捕えられるのだろうか。

Jim の想像力の流れと同様、Marlow の言葉も逆流して前の言葉を否定する。矛盾する二つの言葉がぶつかり合う。例えば Marlow は Jim を “one of us” と断言した後で、そういう者は恐怖に負けない天性の強さを持つと言って現実の Jim との違いを暗示し、そして彼を実際に “a sinner” (p.97)、“no mean traitor” (p.157) とも呼ぶ。また事件を語る Jim を “subtle” と行って彼を表現することの難しさを嘆いた後で、“he complicated matters by being so simple, too” (p.94) と行って、ついには “the simplest poor devil” と呼ぶ。また彼は Jim を “great” とも “no good enough” とも言い (p.318)、“not articulate” (p.230) とも “wonderfully expressive” (p.232) とも言い、また Jim の “artful dodges to escape from the grim shadow of self-knowledge” (p.80) を示すかと思えば、すぐに彼の罪について、“You must understand he did not try to minimize its importance” (p.82) とも言い、そして Jim が Patusan で故国への郷愁を感じたことに意味があると言ってすぐに、彼は決して帰ろうとはしなかったと断言する。さらには、自分に見られるものは人間の外面ではなく内面だけだと言って

おいて人間の “elusive spirit that no eye can follow” (p.180) を語り、岡目八目、自分より聞き手の方が話をよく理解できると言っただけで、同時に聞き手の想像力不足を嘆いたりもしている。そうした矛盾の一方に、判断の迷いがある。法廷での Jim の心を “insolence or despair” (p.69)、ボートでの彼の船長らへの態度を “Firmness of courage or effort of fear?” (p.122)、彼の過去に対する行動の仕方を “shirking his ghost... or facing him out” (p.197)、奥地への旅で銃に玉を詰めないことを “some wrong-headed notion... or... sheer instinctive sagacity” (p.229)、Cornelius への無防備な態度を “Jim’s absurd carelessness or else his infinite disdain” (p.285) などと Marlow は迷い、また Patna 号事件を語る時の Jim の落ち着きぶりについても “the outcome of manly self-control, of impudence, of callousness, of a colossal unconsciousness, of a gigantic deception” (p.78) と見方が定まらず、また Jim に係わる自分の動機についてさえ、単なる好奇心、自分のため、社会倫理のため、彼が人類の象徴だから、と曖昧である。またそうかと思えば、対立する語は結ばれて、“He would be confident and depressed all in the same breath” (p.79)、“It was tragic enough and funny enough in all conscience” (p.129)、“he was imprisoned within the very freedom of his power” (p.283)、“all these things that made him master had made him a captive, too” (p.247)、あるいは “sincerity of falsehood” (p.93)、“the fetters of that strange freedom” (p.262) といったような矛盾語法になることもある。

言葉だけではない。光の中の影、闇の中の光といった Jim の相反するイメージ、優秀な船長 Brierly と幻覚に襲われる Patna 号の脱走機関長、経験主義者のフランス人海軍大尉とロマン主義者 Stein、といった Jim へのコメントとなるような相反する人物や意見やエピソード、また Jim の Patusan での成功と Patna 号での失敗を並置するといった、前へ進もうとする物語の時間を逆流させるかのような語り方、さらには口述と記述(36章以降は Marlow は手紙で語っている)という物語の示し方に至るまで、Marlow の語りは再帰性、相殺性の原理で貫かれているのだ。

これら矛盾し、退け合う言葉や見方において、選択を問うているように見える時でも、作者は読者にどちらか一方を選ばせようとしているのではない。一方の項を選ぶことは、Jim をその言葉の下に押し込め、石化させ、疎外させること、真実を霧で覆い隠すこと、Jim の Patusan を作ることである。相反する言葉は、一方が真なら一方が偽というのではなく、Jim の二つの想像力同様、ぶつかり合って真実を霧の中から現すもの、補償し合って“the illusion of the open door”を作るものとしてある。

例えば“one of us”と“traitor”の対立。それはJim についての Marlow の直感と Jim の犯罪の事実との対立だが、それ以前に Jim はその二重性を既に内在させた者としてある。即ち、彼は、人々のために働き、人々に信頼される英雄になろうとするその利他的な夢の内容においては、確かに社会規範に忠実な“one of us”である。しかし、夢見ることは孤独と現実逃避を前提とする以上、夢に耽る Jim は既に社会に背を向けた利己的な“traitor”でもある。つまり Jim は夢において、社会の内にいると同時に、その外にもいることになるのだ。同様に“insolence or despair”の対立においても、法廷に立つ Jim は、社会的名誉を失った者としては“despair”の状態だが、他の船員のように逃げたりせず、独り己れの罪に立ち向かうことは、少なくとも彼には自分が社会の法に忠実な正しい人間であることを証する行為であり、その意識によって“despair”は同時に“insolence”にもなる。このように夢が、想像力が、Jim を同時に相異なる二つの存在にする。だからそのような Jim を忠実に表現するためには矛盾した二つの言葉、二つの見方、二つの判断がどうしても必要であり、どちらか一方では、真実ではあってももう半面の真実を否定するために、結局真実を覆い隠す霧とならざるをえないのだ⁶。

それ故、Marlow は二つの目を持っていると言える。つまり、二重存在者としてある Jim を、そういうものとしてありのままに、立体的に、捕えるための二つの目である。Marlow に対し、多くの Jim の判断者は Jim に明確な判断を下すが、そのことで片目しか持たないことを示す。彼ら片目の者の運命は、Jim の事件がもたらす意識の逆流によってその視野を消し去られることからく

る、Jimと同じ盲点へのジャンプである。フランス人大尉は“what life may be worth... when the honour is gone--” (p.148) といって絶句し、Brierlyは“*But when the call comes... Aha! ... If I...*” (p.68) と言葉を失って数日後に海に飛び込み、Steinは“*Terrible! Terrible! What can one do?*” (p.350) と叫んで彼の夢であり命である美しい蝶に別れを告げる。一方、双眼のMarlowにそうした盲点は生じない。生じたとしても(例えばJewelとの会話の場面)、すぐに別の目の視野がその空白部分を償う。それ故、Marlowは語り続けることができるのだ。

Marlowのこの二つの目は、人間を見る二つの見方、人間の二つの存在論に係わっている。つまり、人間の存在感は、その個人の主観性、即ち孤独のうちに展開される理想に向けての心の葛藤にあるのか、それともその客観性、即ち社会の一員として、人と人とのつながりの中に存することにあるのか、という対立である。Jimの死後、Marlowは語っている。

“And that’s the end. He passes away under a cloud, inscrutable at heart, forgotten, unforgiven, and excessively romantic.... He goes away from a living woman to celebrate his pitiless wedding with a shadowy ideal of conduct. Is he satisfied--quite, now, I wonder? We ought to know. He is one of us.... Now he is no more, there are days when the reality of his existence comes to me with an immense, with an overwhelming force; and yet upon my honour there are moments, too, when he passes from my eyes like a disembodied spirit astray amongst the passions of this earth, ready to surrender himself faithfully to the claim of his own world of shades.

“Who knows? He is gone, inscrutable at heart. (p.416)

夢を追う孤独な理想主義者としてのJimと“one of us”としてのJim——Marlowの目に、一方が強い現実感を持って迫れば他方は薄れ、その捕え難さの故

に Jim は “inscrutable” となり、またその故に、最後の言葉は語れないという彼の諦めがくる。しかしそれは、最終的に Jim の完全な不透明さを意味するのではなく、前述したように、彼が逆説的な存在者として既に見られている、語られているということの意味するものなのだ。例えば “a man panting under a burden in a mist” (p.221) という霧の Jim 像にしても、それは Marlow の意識には謎としての Jim だとしても、そのイメージは既に二つの目で見られた Jim 像、即ち名誉を失って苦しむ社会的存在者としての Jim (“a man panting under a burden”) と、想像力の霧の中に閉じ込められた個人存在者としての Jim (“a man... in a mist”) との合成された像でもある。Jim は Marlow の意識にはよく見えなくても、彼の二つの目には既にはっきりと見えている。つまり、何も語れないという否定的ビジョンを通して、逆説的に、“the illusion of the open door” は既に作られ、Jim の全体像は語られてしまっているのだ。

このように、Marlow が矛盾した曖昧な形で真実の Jim 像を提示するとしたら、それを一つの明確な立体像へと結像させ、その意味を認識するのは読者の役割である。Lord Jim の語りの原理は、人間の二つの目による立体知覚の原理に似て、読者を大脳に見たて、語り手に読者の二つの目の機能を果たさせることによって、読者に Jim の姿を立体的に見させようとするところにある。主人公との同化の可能性の中での作者のアイデンティティの確立も、この原理のうちにある。即ち、作品をただ己れの想像力の発露するままに、よって Jim 的に、書くのではなく、読者の存在を意識し、読者を作品の中に引き込んで積極的にそのビジョンを見させようとするところで、作品を、自己完結的な Patusan ではなく、読者に対して開かれたものにする。またそのことで、作者は自分を孤独な Lord Conrad としてではなく、読者と向き合う者、読者と結び付いた “one of us” として位置付けようとするのである。Marlow の語りの場の設定は、何よりも作者のそうした姿勢を示すものに他ならない。

4

しかし、話はまだ終わらない。作品にはこの双眼の Marlow の他に、最初の四章を語り、Marlow の語りを枠付ける全知の語り手がいる。彼の観点は明確である。それは想像力を “the enemy of man, the father of all terrors” (p.11) と見、“the perfect love of the work” (p.10) や “the men who surround us” (p.21) に肯定的価値を見る経験主義的な視点で、彼はそれにより、夢に閉じ込める Jim を明確に、客観的に描きうるが、またそう見ることで、Jim のもう半分の姿を見逃す片目の語り手ということになってしまう。それは、この語り手を作者と見る時、次の逆説となって現れる。即ち、彼がいかに想像力を否定しても、作品はそれ自体が想像力の所産に他ならない、だからその否定は自己否定につながるという逆説である。とすると、この全知の語り手は、Jim と同じ自己欺瞞に陥った Lord Conrad となるのだろうか。

この Jim との同化の可能性の中で、Jim の物語がこの語り手においても繰り返される。ちょうど Jim にとって自分の破壊的想像力が外的なもの、例えば Brown という他者として現れたように、作者の破壊的想像力も Marlow という他者として現れる。そして Jim がその負の想像力によって英雄の世界を崩され、その力の前に客体化されたように、作者も Marlow によりその明確な視野を壊され、彼の前に客体化される。ただし、作者はあらわとされた盲点、つまり客体としての自己をその視野中に置くことで、同時に Jim との差を示してもいる。その客体とは、36章で Marlow の話の聞き手、及び彼の手紙の受取人として姿を現す “the privileged man” (p.337) がそれである。

この一見重要とも思われぬ人物を作者の客体化されたもの、いわば受肉したロゴスと見なしうる根拠は主として二つある。一つは、彼が他の Marlow 物、“Youth”、“Heart of Darkness”、“Chance” における「私」、つまり Marlow の聞き手でありかつ小説の最終的語り手となる匿名の人物（作者自身）に相当するからである。彼は聞き手の中で Jim に興味を示した唯一の人物とあり、また手紙の受取人として、*Lord Jim* を書きうる立場にいる。第二に、思想の同一性があ

る。Jim が運命を克服したと認めない見方や、“we must fight in the ranks or our lives don't count” (p.339) と要約される彼の思想は、想像力を否定する最初の四章の語り手の思想と異なるものではない。

なるほど、この人物は最初の四章に示される Jim の初期の事実を知りえない。だがその矛盾は、Conrad の小説の語り手がしばしば持つ特徴であって、*Lord Jim* 前後の作品を見ても、*The Nigger of the 'Narcissus'* の最後に現れる「私」は小説の語り手として全知のはずだが、最初は視野を限定された乗組員の一人として描かれているし、*Nostromo* でも、全知の語り手に語られるにもかかわらず、一度だけ現れる「私」が、その Sulaco を訪れた時期から、“the privileged passenger” という、Mitchell 船長の観光案内の聞き手として現れる人物、つまり物語とは全く無関係の旅行者であることが暗示されているのだ。

この語り手の一見矛盾した特徴は、Conrad の海洋小説に描かれる理想的船長の姿を反映するものとしてあるだろう。彼らは、視野を限定されているにもかかわらず、Allistoun 船長のように、船上のどんな小さなことも見逃すことはない。この全知性は、彼らが、ともすると自分の感情や想像力の内に閉じ込められてしまう未熟な船乗りと違い、船長という船内における自分の客観的位置の自覚を通して事実と経験の世界に目覚めているから、自己を超越してその外部の世界から自分と自分の置かれた状況を見ることができからだ。彼らは、自分を見るその非人称的な外の視点によって、なるほど MacWhirr 船長のよう想像力欠如からくる喜劇性を持つこともあるが、しかしどんな嵐に遭遇しても、自分の位置、自分の義務を見失うことなく船を指揮できるのである。

Lord Jim で作者が自己を第三者として描き込むことは、彼がそうした理想的な人間であることを示すと共に、また想像力における主人公との同化の可能性の中で、主人公との差異を示すことにもあつたろう。即ち、一方は Lord、一方は全知の者として、共に己れの想像力の作る世界の中で絶対主体としてありながら、想像力の逆流に直面した時、Jim はその世界内における己れの位置を保てずに、盲点に飛び込んで自滅するが、語り手は自己を客体視し、自分の立場を守る。これは、Jim が自我の内に閉じ込められた未熟な船乗りなら、作者

は自我の外の事実の世界に目覚めた熟練した船長であること、また作品が想像力の所産だとしても、Jimの王国のように崩れない、確実性と永続性を持つことを示すものなのだ。このように、一見何気ない“the privileged man”の持つ存在意義は大きい。彼は作者の主人公に対する優位と作者としての資格を保障するものであり、それなくしては、作品は穴のあいた船と同様、いつ崩壊するかわからないのである。

注

- (1) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad : A Critical Biography* (Harmondsworth : Penguin Books, 1960) , pp. 267-68.
- (2) 引用する文献の他、次も参照。Royal Roussel, *The Metaphysics of Darkness* (Baltimore and London : Johns Hopkins Press, 1971), Daniel R. Schwarz, *Conrad : Almayer's Folly to Under Western Eyes* (London : Macmillan Press, 1980) , Ian Watt, *Conrad in the Nineteenth Century* (London : Chatto & Windus, 1980) .
- (3) テキストは Joseph Conrad, *Lord Jim* (London : J. M. Dent & Sons, 1946) にする。以下、引用は本文中に頁数を記す。
- (4) John O. Perry, “Action, Vision, or Voice : The Moral Dilemmas in Conrad’s Tale-Telling,” *Modern Fiction Studies*, 10 (1964) , 7 .
- (5) Dorothy Van Ghent, *The English Novel : Form and Function* (New York : Harper & Row, 1953) , p. 234.
- (6) 従って、Albert J. Guerard の言う Jim の最後に関する「中心的曖昧さ」についても、それは償いと自己満足という二重の意味を持つこととなる。Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press, 1958) , p. 144参照。